Historia＝「歴史」概念の成立

柳　沼　重　剛

1

英語の History の語源がギリシア語の historia であっても，ギリシア人が historia という語を使っている場合それは必ずしも「歴史」を意味してはいない，というのは今では常識になっていて，その例証として引合いに出されるのがヘロドトスの『歴史』の最初の文章だというのも大方決まっている。ここでは historia は「歴史」ではなく，「研究」「調査」という意味で使われているのだと言われ，翻訳でもすべてそうなっている。ところがその historia という語を，それから1世紀足らず後に，アリストテレスが『詩学』第9章と第23章で使っているのも有名だが，今度はすべての翻訳が，何のためらいもなく「歴史」と訳している。また，これらの箇所につけられた注釈にしても，例外なく historia を「歴史」と決めてかかった上で論じている(1)。

ここで何より大事なことは，ヘロドトスにしてもアリストテレスにしても，この語を使うに際して，何の断わりも注釈もなしにただ historia と言っているということで，つまり，上のような解釈が正しいとするならば，ヘロドトスは，historia と言えば読者は間違いなく「研究」という意味にとってくれると信じ，アリストテレスは，historia と書けば誰もが「歴史」を思ってくれると期待していたことになり，さらに，もしそうだとすると，ヘロドトスからアリストテレスに至る1世紀足らずの間に，historia の語義が変わった，あるいは新しい意味が生まれた――しかもその際，どちらの意味で使われているのかは，前後関係から容易に判別できるという所まで来ていた――ということになるのだが，それでよいか。以下はそれを確認する作業である(2)。

2

まずヘロドトスとアリストテレスの上記の箇所を読んでみる。はじめにヘロ

ドトス——

「本書はハリカルナッソス出身のヘロドトスが，人間界の出来事（*τὰ γενόμενα*）が時の移ろうと共に忘れ去られ，ギリシア人や異邦人の果した偉大な驚嘆すべき事蹟の数々——とりわけて，両者がいかなる原因から戦いを交えるに至ったのかの事情——も，やがて世の人に知られなくなるのを恐れて，historia を書き述べたものである」（松平千秋訳）

松平先生の訳ではもちろん historia などとは書いていない，「自ら研究調査したところ」となっている。それでは何を「研究調査」したのか，つまり，historia の対象は何だったのかと言えば，「人間界の出来事が……忘れ去られ，……偉大な……事蹟の数々……も，やがて……知られなくなるのを恐れて」historia を行なったと言っているのだから，研究調査の対象は「人間界の出来事」と「偉大な事蹟」，あるいはそれらに関わりのあることだったわけである。

次にアリストテレス『詩学』第9章（1451 a38 以下）。

「Historia を行なう人と詩人とは，韻文を使うか散文を使うかという点で異なっているわけではない（ヘロドトスの文章は韻文に直すこともできるだろうが，直したからといって historia でなくなるわけではない）。むしろ両者は次の点で違っているのである。すなわち，一方は実際に起ったことを語り，一方は起るであろうことを語る，という点である。従って詩の方が historia よりいっそう哲学に近く，重大である。なぜなら詩は普遍に関することを語り，historia は個別に関することを語ることになるからである。」

この文を書いたアリストテレスにとっては，historia とは「実際に起ったこと」（これの原語は，先のヘロドトスの文中で「（人間界の）出来事」と訳されたのと同じ語，*τὰ γενόμενα* である）を語り，「個別に関すること」を扱うものだったことになる。アリストテレスはさらに，上の「普遍」と「個別」について説明を加えて，普遍というのは，どういう人間にとってはどう言ったり振舞ったりするのがもっとも，あるいは必然と思えるかということを示すことで，だから，詩でも固有名詞は出て来るがそれはあくまでもつけ足しで，ねらいは普遍の方にある，と言い[3]，個別というのは，例えばアルキビアデスが何をしたか，あるいは何をされたかということだと言っている。しかしここまで言わなくても，「実際に起ったこと」というのは個々のことに決まっているだ

ろう。煎じつめれば，ここの historia は「個々の実際の出来事」について語ることを意味していて，それならヘロドトスの historia と実質的に何が違うのかということになる。

しかし非常に大きな違いがあることも認めないわけには行かなくて，それは，ヘロドトスの historia は人間界の「出来事」 *τὰ γενόμενα* を研究することだったと言っても，その *τὰ γενόμενα* はあくまでもこっちで補ってやった，つまり， *τὰ γενόμενα* ははじめから historia という語の意味の一部としてそこにあったわけではないのに対して，アリストテレスでは，その *τὰ γενόμενα* が「historia とは……」という主語に対する述語として，historia 自身の中から抽出された，つまり *τὰ γενόμενα* ははじめから historia という語の意味の一部をなしていた，ということである。別の言い方をすれば，ヘロドトスにとって historia とは，何を研究するのでもかまわなかったとまで言っては乱暴なら， *τὰ γενόμενα* 以外の何かを研究するのでもかまわなかったのに対して，アリストテレスの上の文では，historia とは *τὰ γενόμενα* を記述する以外のことではなかった，ということになる。

この『詩学』第9章は，アリストテレスの歴史に対する無理解，少くとも共感の乏しさを示す証拠としてしばしば引合いに出される箇所だが，これに劣らず評判の悪いのが第23章（1459 a21 以下）である。

「(叙事詩においては）物語の構成が historiae のようであってはならない。Historiae においては，明かにさるべきはひとつの行為ではなくてひとつの時である。そのひとつの時に起った限りのことは，それが一人の人間に起ったのでも多数の人間に起ったのでもかまわないし，その出来事相互の関係はたまたま偶然にというのでもよい。例えば，サラミスの海戦とシシリー島の対カルタゴ戦とは同時に起ったが，だからと言ってこのふたつの事件が同一の結果に収斂されるわけではない。同様に，今度は同時にではなく，相次ぐ時の経過の場合でも，ある出来事が他の出来事に次いで起る，しかしそこから何かひとつの結果が生じては来ない，ということがある。」

このまま正直に読むと何とも馬鹿馬鹿しい発言と聞えることは確かで，これでは歴史家が苦情を述べるのももっともだと思える。しかしアリストテレスがこんな馬鹿馬鹿しいことを本気で言うだろうかと怪しみ出すと，そのこと自体が問題になるので，今は目をつぶって，要するにアリストテレスは，ここでは，historia においては時が重要な統一原理なのだということを強調しているのだ，とだけ考えることにする[4]。すると， historia が「歴史」であるにせよないに

せよ，とにかく「個々の実際の出来事」を「時」に即して扱うのが historia だとアリストテレスは上の2箇所で言っていることになる。そして実際の出来事というものは，つねに特定の時に起るものであるから，これは当然のことだということになり，ヘロドトスの「人間界の出来事」にしてもそうだということになる。ただしここでもまた，先の第9章の場合同様両者の違いも認めなければならなくて，それは，ヘロドトスの historia も時を無視して行なうことはできなかったに決まっているにせよ，それがどこまで「historia における時の問題」として自覚され概念化されていたかは分らないのに対して，アリストテレスでは間違いなく概念になっているということで，この違いはやはり大きい。そして，ここまで来たら，historia を「歴史」と訳すまいと頑張るのはへそ曲がりかも知れないと思えて来る。

3

次に，今見た『詩学』の2箇所以外で，アリストテレスが historia という語をどういう意味で使っているかを見ることにする。実はこの historia という語は，その意味が重要だと思える割には使われたことの少い語であって，とくにアリストテレス以前の文献からこれを拾おうとすると，余りの少なさに驚くほどである。その中にあってアリストテレスが，この語を25回使っているのはむしろ例外と言ってよい（因みにプラントは，あれだけの著作の中で3度しか使っていない）。

ところでその25例だが，そのうち1例は著作の表題で，『動物に関する historiae』という。これは我が国では通例『動物誌』と訳されているが，この表題の意味するところは，「動物に関する研究（の結果得られる知識）」であろう。従って，historiae 自身の意味は「研究」あるいは（historiae と複数になっているところを見れば）「諸研究」，あるいは「研究の諸結果」「知識」ということだろう。しかし書物の表題としてなら，研究の結果得られた知識のことをも「研究」と呼ぶのは普通のことだろうから，この表題中の historiae の訳語は「研究」でも「知識」でもよい。

残りは24例になるが，その24例中14例までが，実は今の『動物誌』という自分の著作の書名の引用で，これらは考察の対象から除いてよい[5]。すると残りは10例だが，そのうち2例は上で見た『詩学』からの2箇所なので，『詩学』以外で目を通しておかなければならないのは8例ということになる。列挙しよ

う。

1.『分析論前書』(46 a24)「もし historia に際して，もろもろの事実にとって真にあることどもが見失われないならば……。」後続の文から察するならば，この historia は事実についての historia であり，historia それ自身の意味は「探究」である。

2.『気象論』(298 b2)「自然についての historia の大部分は，物についての historia である。」問題なく「探究」の意である。

3.『宇宙論』(291 b6) アレクサンドロスに向かってアリストテレスが書いている，「今や最高指導者となり給うた陛下におかせられては，最大なるものの historia に参加あそばし，哲学をば些事なりとし給わず，むしろかかる贈物を用意召されて高貴の方々を客人とお迎えあそばすこそふさわしき御事なれと小生は考えるものにございます。」この「最大なるもの」というのは何で，それの historia と哲学とはどういう関係にあるのか，少なからず気になるが，historia 自体の意味は「探究」でよい。

4.『霊魂論』(402 a4)「知識は一般に美しく価値あるものだが，ある知識は他の知識よりいっそう美しく価値あるものであるゆえに，霊魂についての historia を第一級の中に数えるのは当然であろう。」これは「第一級の知識」を得るための「探究」であるが，上記3とここで historia の対象が，通例とは異って，「霊魂」とか「最大のもの」とか，どうやら人間の内面に関わっていることは注目しておくべきである。

5.『動物誌』(491 a12)「個々の動物の相異点と共通点のおよそを述べたのち，それらの原因を発見せねばならない。なぜなら，こうして各動物についての historia から始め（て原因探究に至）るのが自然な手順だからである。」ここでは historia は，動物についての共通点と相異点との「探究」である。

6.『問題集』(917 b8)「一体なぜ，ひとつの出来事に集中した historia を聞く方が，多くこのことに関わる historia を聞くより気持がいいのか。」ひとつのことに集中した「探究」，多くのことに関わる「探究」の結果を聞く，ということだろうが，それぐらいならいっそのこと「説明」「話」という意味にとってしまった方がすっきりする。そしてそうだとすると，これは「話」という意味での historia の初出箇所ということになる。

7.『弁論術』(1360 a37)「……従って立法のためには旅行記が役に立ち……政治上の助言のためには，人間の行為について書く人々の historiae が役に立

つことは明かである。」これはまた「探究」である[6]。そして探究の対象は「人間の行為」だから，このhistoria の用法はヘロドトス第1巻のものと全く等しい。

8.『経済学』(1346 a29) これは偽書だと断定されている著作なので，数の中には入れぬ方がよいかも知れない――「昔の人々が金を手に入れるためにやったこと，あるいは策を弄したことで，記すに値すると思うものを集めた。そういう historia が無益だとは私は思わないのである。」これもまた「探究」でよい。

以上8箇所（8を除けば7箇所）でアリストテレスは，7 (6) 箇所で historia を「探究」という意味で使い，残り1箇所で「話」という意味で使っていた。そして「探究」を意味する場合，その探究の対象は2箇所で「自然」，3 (2) 箇所で「行為」または「事実」，2箇所で内面に関わっていた。しかし，historia 1語で「人間の行為の（時間に即した）探究」を言い表している例というのはなかった。すなわちアリストテレスの historia という語の語義の与え方の中でも，『詩学』の2例は特例だということである[7]。

4

そこで次に，アリストテレス以前の historia の用例を見ることにする。これは，さっきも言ったように驚くほど少い。

今日検証し得る限りで最も古いのはヘラクレイトスのもの（B129 DK）である。これはディオゲネス・ラエルティオスが（Ⅷ6），ピュタゴラスは何ひとつ著作を残さなかったと言われているがそんなはずはない，その証拠に，と言って引用しているヘラクレイトスの言葉である。ただしこの断片はとかく問題があって，まず Diels がヘラクレイトスのものではないのではないかと疑った。それを後の補訂者 Kranz が，さりとて偽作と断定するほどの根拠にも乏しいとて救った。といういきさつがあり[8]，またそれにしてもこの断片の後半は意味がとりにくくて，それでまた真作かどうか疑われもしたが，Burnet, Kirk, Guthrie の諸家はこの断片全体を真作と認めている[9]――「ムネサルコスの子ピュタゴラスは，他の何びとにもまして historia を行ない……。」後半は問題があるにせよとにかく，ヘラクレイトスは historia を polymathia（博学多識）と関連づけてそれを似而非哲学だとし，その元凶としてピュタゴラスを非難して

いる，というのが真相らしい[10]。

この断言から言えることはこうである——前6世紀の後半には，ヘラクレイトスの眼から見ればhistoriaと呼ばるべき種類の「探究」がすでに行われていた（ただしピュタゴラス自身が自分の営みをhistoriaだと認めていたかどうかは別である）[11]。そしてそのhistoriaは，ヘラクレイトスに言わせれば博学多識で外へばかり向かって内に心が向かない，そういう態度だったのである。

このほかのいわゆるVorsokratiker，中でもミレトス派の人々など，historiaをしなかったわけはないと思うのだが，実際にはhistoriaという語の用例は現存する断片の中にはない。また，ヘカタイオス，アクシラオス，ペレキュデス等の「歴史家」の断片にも見当らない。いや，あるにはある。しかしそれらはすべて，その断片の出典である後世の著者の文章の中にあって，我々にとって問題である哲学者・歴史家自身の文の中にはない。

そういう中にあってふたつだけ目を惹くものがある。ひとつはヘカタイオスに関するスダの辞典の記述の中の文（FGr Hist 1T1＝DK 7A2）である。「彼がはじめて散文でhistoriaを公にし，ペレキュデスが*συγγραφή*を公にした」というものである。ここでhistoriaが何を意味しているにせよ，また，スダでは余りに時代が遅ぎる（恐らく10世紀）にせよ，その信憑性もかなり問題であるにせよ，とにかくhistoriaが*συγγραφή*とは別のものとして扱われ，かつそれと対照させられている点が目を惹くのであって，このことについてはまたあとで触れる。

もうひとつは5世紀の文法家マクロビウスの『サトゥルナリア』に引用されたディデュモスの文（FGrHist 2F1＝DK 9B21）で，「とにかくこのアクシラオスは，すべての河川の中でアケロオス河が最も古いということを，みずからhistoriaによって明かしたのである。彼は言う，〈オケアノスはおのが妹テテュスをば娶って三千の河を生んだが，中でもアケロオスは最年長の河なりとて人々の尊崇をあつめている〉。」これも出典はかなり後世のものだが，神話考証という仕事（一種の探究）をhistoriaと呼んでいる点で注目すべきであり，ヘカタイオスの著作の一つが「『系譜』あるいは『英雄誌』あるいはHistoriae」と呼ばれていること，ペレキュデスの著作にも「『神統記』あるいはHistoriae」と呼ばれるものがあることを思い合せるならば，historiaという語がその初期の用例において持っていた主要な意味の一つを知ることができるであろう。

以上の出典に次いで古い出典というと，いきないヘロドトスになってしま

う。先に挙げた有名な冒頭の文章以外に，ヘロドトスは4回 historia という語を使っている。

1. II 99.1.「ここまでは私が自分の眼で見たこと，私の見解，それに私の historia を述べて来たが，これより先は，エジプト人の話を私が聞いた通りに記し，私が自分で見たこともつけ加えることにする。」——ここでは historia は「自分で見たこと」や「自分の見解」と同列に扱われ，反対に「私が聞いた話」とは対照させられている。つまり historia とは，他人から聞いたこととは対照的な何かであり，自分で見たことや自分の考えとは同種ではあるがそれらのいずれとも別な何かだ，ということになる。これは恐らくこういう段階をなすものであろう——自分が眼で確かめたこと，確かめた上で考えたこと，これは一番信頼できる。眼で確められなかったこと，確かめようのないことは，いろいろ尋ねたり調べたりして見解を得る。これが historia で，信頼度から言えば中間に位する。そしてさらに，こちらから尋ねたのではなく，つまりヘロドトスとしては偶然，あるいはただ受身に聞いた話というのがあって，これは historia を経ていない。信頼度では最も劣る[12]。ただし，自分で見て知っているというのは要するにただそれだけのことであるのに対して，historia は未知を既知に転ずることであるから，ヘロドトスにとっては historia こそが学問の道だったことになる。

2. II 118.1. ここではヘレネ伝説が扱われていて，これには，ホメロスが語っているのとは別の，ヘレネはパリスと共にトロヤへ行ったのではなく，エジプトに留まって夫メネラオスの帰還をそこで待っていたのだとする異伝があることを紹介している——「私が祭司たちに，ギリシア人はトロヤ戦争について嘘の話を伝えているのかと尋ねると，そのことについては historia によってメネラオス自身から（聞いて）知っている[13]のだと言って次のような話をした。」この historia はやはり「調査」あるいはその方法としての「訊問」であろう。

3. II 119.3. 上記につづくやはりヘレネのエピソード。メネラオスはエジプトからリビアへ向かったのだが，そこからどこへ行ったのかはエジプト人も知らない。彼らの言うところによれば，「メネラオスの行状のうち，ある点については historia の結果知ったのだが，自分たちの所での出来事については確実に知っているということである。」——ここでは，historia の結果はじめて知られたことと，historia を経ないでもはじめから知っていたことが区別されていて，先の99.1の場合と同じである。以上3箇所の historia はいずれも「調

査」「訊問」，広い意味での「探究」を意味している。

4.　Ⅶ　96.1．これひとつだけ飛び離れて第Ⅶ巻である[14]。この巻の§61以下はギリシア遠征のペルシア軍に加わった諸民族の軍勢のカタログで，そのうち§§61-88は陸上部隊，§§89-99は海上部隊である。さてその海軍のカタログの中の96.1にこういう文がある――「これらすべての部隊には……それぞれ同国人の隊長がいたが，historia の文 (logos) にとって必要不可欠というわけでもないと思うゆえ，ここでその隊長の名をまでいちいち挙げることはやめる。」[15]――この historia は LSJ の辞典がわざわざこの文章を例示して，"written account of one's inquiries", "narrative", "history" という語義を与えているものである。訳語としては "history" というのが一番すっきりしているだろうが，ヘロドトスの意味するところは "written account of my inquiries" ということであろう[16]。

ヘロドトスと言えばすぐツキジデスを思うのは順当だろうが，ツキジデスは，historia はおろか，形容詞 historikos も動詞 historein も，ただの1度も使っていない。そればかりか，著作の表題すら Historia ではない（実はあの有名な『歴史』には表題がついていないのである[17]。ひょっとしたらツキジデスは，徹底して historia に発撥を感じているのではないかとさえ思えて来る[18]。このことは丁度，アリストテレスが歴史家に言及する時はいつもヘロドトスの名を挙げ，ツキジデスについては，彼の全著作を通じて1度も触れていない，というのと呼応して我々を困らせる[19]。しかし，何かがないことについてそれはなぜないのかを説明することは至難の業だから，今はただ，ないという事実を覚えておくにとどめる。

ヘロドトスとほぼ同時代のものとして，エウリピデスの断片 910N というのがある。出典はアレクサンドレイアのクレメンスの『雑纂（ストロマテイス）』p. 634とテミスティウスの『演説集』304D で，テミスティウスがエウリピデスの言葉として引用しているので辛うでてエウリピデスのものと認定されているが，何という作品の一節なのかは無論分らない。そして，これが現存する悲劇（および喜劇）のテクストの中に見出される唯一の historia の用例である。

市民らを破滅に至らしめることなく，
不正の業に彼らを駆り立てることもなく，

ひたすらに不死なる天然の不滅の掟を打ち眺め,
そもいかにしてかくあるやを思いつつ,
historia の道を知るこそ幸いなれ。

これも自然の探究のことを言っていると言えば十分だろうが，これが悲劇・喜劇を通じて唯一の historia の用例だというのはやはり気になる。それどころか実は，この1例を除けば，historia は完全に散文にしか使われていないのである。

ヒッポクラテスにも historia の用例がひとつだけある。『古い医術について』20で彼は，哲学者たちが，医術を知るにはまず人間とは何かを知っていなければならぬと説いているのに反対して，順序はその逆でなければならず，医術こそ人間とは何かを知る historia なのだと主張する。肉体としての人間の「探究」のことであろう。

プラトンを見る。

1. 『パイドン』(96 a8) ソクラテスが言う，「私は若い頃，あの自然についての historia と呼ばれる知識（ σοφία ）に何とも驚くほど夢中になっていた。」これは「研究」でも「探究」でもよいがそれ以外の意味ではない。そして「探究」の対象が「自然」であることを記憶し，かつ（これは恐らくこれが唯一の例ではないかと思うが），historia が σοφία の一種と見なされていることも注目しておこう。

2. 『パイドロス』(244 c8) （デルポイの巫女のように，狂気になってはじめて予言者たり得るのと違って，正気のまま予言に従事する人もいるわけで，そういう人々は）「考えることによって（ ἐν διανοίᾳ ）人間としての憶測（ οἴησις ）を得，その憶測によって未来についての理解（ νοῦς ）と historia を得る。」この historia の対象が「未来」だというのも珍しいが，意味は表面に浮いては見えない。ただし，憶測に発するものであって，未来に関して理解と共に得られるものなのだから，「（探究の結果得られる）知識」ととっておけばよいだろう。

3. 『クラテュロス』(437 b1) これはソクラテスが好んでしばしばやってみせる "folk-etymology" の一例で，「流れをとどめる (histesi) から historia なのだ」などと言っていて，我々には何の参考にもならない。

4.　それより役に立ちそうなのは，これは historia ではなく形容詞の historikos の用例だが，『ソピステス』267 e2 の方である。ここでは「まねる」ということが問題にされていて，実はこの「まねる」のに2種類ある，つまり，まねる対象について知識を持たず，単なる思わく（**δόξα**）だけでまねるのと，知識を持って（**γιγνώσκων**）まねるのとがあるとされ，そして前者を「思わくのまね」と呼び，後者を「historikos なまね」と呼ぼうと提唱されるのである。すなわち「知識を持っている」ことが historikos と呼ばれるのであって，historia とは知識だという考えがここには前提されている。Historia の捉え方は上記2の『パイドロス』の場合と同じである。

以上でプラトンはすべてであり[20]，プラトンばかりでなく，確実にアリストテレス以前と見なし得る historia の出典もこれで尽きた。全12例あったが，そのうち10例が何らかの意味で「探究」を表しており，2例が「知識」を表していた。そして「探究」を表している場合，その探究の対象は，神話である例が2，自然である例が3，何らかの事実である例が5であった。

こうしてアリストテレス以前には，アリストテレス『詩学』における historia の意味――「時に即した行為（出来事）の探究」――いつまでもこう長ったらしく言うのは面倒で，これを歴史と呼んでいいなら「歴史」――で使われた historia の例というのはひとつもないことを知る。それならば historia＝歴史という概念の発明者はアリストテレスか。しかし用心はしなくてならない。はじめにも言ったように，アリストテレスは historia を歴史という意味で使うに際して何の用意もしていない。つまり historia＝歴史を素直に受容れる下地が読者の方にもあったと見るべきである。それに，そのアリストテレス自身，『詩学』以外の著作では historia＝歴史をただの1度も使っていないという事実にも目を向けなければならないだろう。とすれば少くとも，アリストテレスとほぼ同時代の諸家の historia という語の用法も知っておかなければならないことになる。しかしその前にひとつ寄り道をしておいた方がいい事柄がある。それは historein という動詞，とくにそれの悲劇詩人における用例についてである。そこで次にそのための Excursus を置くことにする。

5

悲劇詩人たちは，上に挙げたエウリピデスの1例を除けば historia という名詞は1度も使っていないが，historein という動詞は延べ33回使っていて，しか

もこの動詞は彼ら——正確に言えばアイスキュロス——が使ったのが最初である。内訳はアイスキュロス4例，ソポクレス13例，エウリピデス16例。しかし問題なのは用例数よりは意味の方で，今便宜上それを3種に分け，(1)知る，(2)尋ねる，(3)話す，とし，これによって各詩人の historia の用例数を数えて一覧表にすると次のようになる。

	知る	尋ねる	話す
アイスキュロス	2	2	0
ソポクレス	1	12	0
エウリピデス	0	15	1

註をつける。アイスキュロスの「知る」＝2というのは『ペルシア人』454と『アガメムノン』676で，共に問題はない。これに対して「尋ねる」＝2の方は不確さを含んでいる。まず1は『プロメテウス』632で，これは「尋ねる」とも「知る」とも読める。そしてどちらを採るかは読む者の主観によって決める他ない。私としては「尋ねる」と読む方が素直だと思ってそれを採る。他の1は『エウメニデス』455にあって，これは厄介である。これは女神アテナを裁判長とするアレイオスパゴスの法廷の場のはじめ，アテナの「氏素姓を申せ」という要求に対してオレステスが述べる言葉の中である——

Mazon はこれを "mon père t'est bien conu" と読んだが，Smyth は "fitting dost thou make enquiry concerning him" と訳した。Italie-Sikes の *Index* は "nosse" と解しているが，Snell は "Ich finde es sehön, dass du nach meinen Vater fragst" と訳した上で，"Meinen Vater kennst du gut" などというのは誤訳だと決めつけている[21]。彼はその根拠を示していないが，私はこの説に従う。なぜなら，historein は「知（ってい）る」という意味の時でも，ただ知っているのではなく，つねに探究したり尋ねたりする過程まで含意しているはずで，従って，「あなたもよく御存じの我が父」というような文脈では使わないと考えるからである。

ソポクレスの「知る」＝1は『オイディプス王』1484，エウリピデスの「話す」＝1は『ヘラクレスの子ら』666で，共に明白である。これ以外の箇所に関しては問題はない。

他の2人に比べてアイスキュロスに用例が少いのは，アイスキュロスがその2人よりも半世紀早いせいだとすれば，この動詞が盛んに使われ始めたのは前

5世紀の中頃だということになる。しかし最も主な意味は「尋ねる」で，語源に最も近い「知る」はエウリピデスで消え，のちにこの語の主要な意味になる「話す」[22] はエウリピデスではじめて現れるということは，この動詞の意味は「知る」「尋ねる」「話す」の順に発生したが，「尋ねる」が生じたのはアイスキュロスの時代，あるいはそれより少しだけ以前だということを示していると思える。一方，「探究」という意味での historia が，上で見たようにすでにピュタゴラスで盛んに使われたとすると，これは今見た悲劇詩人の historeinの用法の状況と合わないように思える。しかし，historia も historein も共に直接 **Ἱστωρ** から派生したのであって，一方から他方が生じたのではない，という言語学者の説明[23]を思い合わせるならば，両者がそれぞれに独立に派生した，そして historia の方が先だったと考えられる。さらに，悲劇での historein＝「尋ねる」の場合，これはつねに「尋ねる」という日常語的な意味であって，「探究する」という意味で使われている例はひとつもない[24]のに対して，historia の方はつねに「探究」で，決して「尋ねること」という，言わばhistorein の動名詞として用いられている例はない。また，historein＝「尋ねる」の場合，尋ねる事柄，つまり historein の目的語はほとんど何でもよいのに対して，historia の対象は上で見たようにかなりはっきりといくつかのものに限られている。つまりこうなる。Historein は **Ἱστωρ** から「知（ってい）る」という意味で派生したが，それより早く同じ **Ἱστωρ** から派生した historia＝「探究」に促されて，「尋ねる」「探す」という意味に転じ，これがこの動詞の主要な意味としてしばらく定着していた。また historia は，historein との用法上の対照から察せられるように，恐らく「探究」という学問の方法を指す専門語として誕生したのである。この語が現れる文献が意外に少なく，とくに，先のエウリピデスの断片を除けば，韻文には全く現れないのもそのためであろう。プラトンに3回しか現れずツキジデスに全く現れないのも，この人たちが historia を自分の方法として自覚してはいなかったからであろう。これで Excursus を終わる。

6

そこで historia そのものに戻って，アリストテレスと同時代の作家を見ることにする。これも数は僅かしかないが厄介である。ことさらに厄介なのはイソクラテスである。いわゆる Attic Orators には historia は現れない。イソクラ

テスにも現れないと思っていると，最晩年の演説『パナテナイア祭』の終り近くなった所（§246）で，突如として1回だけ現れる。これが厄介だというのは，このhistoriaが「歴史」を意味しているのかどうか俄かには断じ難いのと，もし「歴史」を意味しているとすると，これとアリストテレスの『詩学』とどちらが先に公にされたか，これを断じ難いのとによる。何はともあれその文章というのは——イソクラテスが『パナテナイア祭』を書き上げたところで，この演説の中でスパルタを非難した條について迷っている。そこで友人たちを呼んで意見を求めると，その中の一人に，かつてイソクラテスの弟子，今はスパルタ贔気というのがいて（これはテオポムポスだと目されている），その者の発言の中で——「（先生のこの演説は）軽く読み流してしまう人々には単純明快だと思えるでしょうが，すみずみまで厳密に読んで，他の人々の演説では見過されてしまっている点を見ようとしますと，historiaと***φιλοσοφία***があふれているわ，さまざまな仕掛やフィクションもふんだんにあるわというわけで，むずかしく分りにくいように思えるのです。」

この「historiaと***φιλοσοφία***」を「歴史と哲学」と訳してよければ話は簡単だがそうは行かない。イソクラテスが***φιλοσοφία***と言う場合，それは「哲学」ではなくてほとんど***παιδεία***「教養」と言うに等しい，というのは知れわたっていることだが，それはこの語が彼の演説中に何遍も出て来るから分るのである。ところがhistoriaはここ1箇所にしか出て来ないから，ここで決断をしなければならないが，「historiaと***φιλοσοφία***にあふれている」という評言は，この演説の§198までの部分を指して言われているのだから，そこにこのhistoriaの意味を知るヒントを求めるのが至当だろう。この部分の主要テーマはアテナイ讃美だが，イソクラテスはそれを，スパルタとの対比において，アテナイが全ギリシア人の和合と異邦人勢力の侵入防止のために力をつくした事例を，神話と歴史から拾い上げることによって行なっている。イソクラテスという人は歴史を書く努力をした人ではないが，自分の議論を強め，相手を攻撃し，あるいは現在に処する道を導き出す，などのために好んで過去をふり返り，そこから例証を引いて来る人である。だから問題のhistoriaは出来事や行為を対象とするhistoriaに違いなくて，それなら「歴史」だということになる[25]。

それでも「歴史」ととることに多少のためらいを感じるのは，ここ以外でも何遍も「歴史」と言う機会があったにもかかわらず，イソクラテスがその都度historia以外の語句をそれに当てているからで，試みに，例えばLoeb版でhistoryと訳されている箇所を片端から当ってみるとよい。***τὰ γενόμενα, τὰ***

πεπραγμένα, τὰ παρεληλυθότα, αἱ πράξεις あるいは，これらのものを（***ἀνα***）***γραφεῖν*** する，***συγγραφεῖν*** する等々ばかりである[26]。また，Blass もこの historia を「歴史」ととる一人だが[27]，その根拠は，この historia と後続の「フィクション」（***ψευδολογία***）が対照されていると見ることによって得られている。しかし historia はここでは ***φιλοσοφία*** と対を組み，***ψευδολογία*** は ***ποικιλία*** と対を組んでいて，前の対と後の対とは対照をなしてはいない。

「歴史」ととらなければ「探究」あるいは「知識」ということになるだろうが，例えば同じイソクラテスの『財産交換論』§45 に，散文で書かれる文章にどういう種類のものがあるかを列挙している中で「半神たちの研究（***ἀναζητοῦντες***）に生涯を捧げた人もいれば，詩人のことを研究した（***ἐφιλοσόφησαν***）人もいれば，戦争中の出来事を記録することを志した人もある……」と言っているのをどう見るかという問題がある。このうち前者，「半神たちの研究」は，我々がこれまで見て来たところでは，historia という語を使うべき典型的な場合だと思えるのに，イソクラテスは ***ἀναζητεῖν*** という動詞を使っている。この語は，先に註(20)で言ったように，プラトンが「探究」ということを言う時に主として用いた ***ζήτησις*** に無論関係があり，だから，少くともプラトンにとっては，historia とは一線を画した概念を表していたのだろうが，例えば上に挙げたアリストテレスの出典の4番『霊魂論』で，「魂の探究」と言う時に historia が使われていて，一般には historia と ***ζήτησις*** の区別は想像するほど截然とはしていない。このように考えると，この ***ἀναζητεῖν*** と ***φιλοσοφεῖν*** も『パナテナイア祭』246の historia と ***φιλοσοφία*** というのと実質的にはほぼ同じことを言っているのかも知れないことになる[28]。

こうして，イソクラテスがただ1回使用した historia は「歴史」かも知れないし，「歴史」でなくて「探究」かも知れない．その可能性は五分五分である。しかし五分五分ならば，アリストテレス『詩学』とイソクラテス『パナテナイア祭』はどちらが先かなどということは，我々にとってはどうでもよくて[29]それよりは，両者をくるめて，historia が主として「探究」であったが，ひょっとすると「歴史」を意味することもあった時代というのを思うべきである。

イソクラテス以外でアリストテレスとほぼ同時代（あるいはやや後）というのをここで挙げてしまえば，デモステネス『王冠について』144に「知識」，ナウシパネス断片 B2DK に「探究」という意味で使われているのと，もうひとつエピクロス『書簡』第1番（ディオゲネス・ラエルティオス X 78f.）で，これは引用しておこう。「（天界に見られるものの本性や原因が何であるかを知ること

こそ自然学のつとめであり，それによって幸福が得られるのだが，同じ知るのでも）historia に属すること――例えば星の出，星の入り，回帰，蝕，その他これに属することどもの知識――は，そういう幸福には少しも関わりがなく，これらのことについては知っていても，その本性が何か，またその最も主要な原因が何かを知らない人々はやはり恐怖をいだくのである。」ここでは本性と原因についての認識が哲学のものとされ，それに対して個々の現象についての探究，知識が historia のものとされて，哲学より一段低いものと見なされている。この点ではアリストテレス『詩学』の historia 観と（肝心の点では違っているが）よく似ている。

7

このエピクロスの言い方を真似れば，上で我々は，historia の対象として考えられたのは神話，自然，事実だと認めたが，神話も自然も，historia の対象となった場合は，「神話とは何か」「自然とは何か」というのではなくて，神話に関するある事実，自然に関するある事実が探究されたのだと言うべきであろう。すると historia とは，つねに何らかの事実を問う探究だということになる。そして，その探究されるべき事実の中に人間の行為，それに基づく事件を含めたのは，上に見た限りではヘロドトスが最初であり，そしてヘロドトス以外にはその例はなかった。ということは，historia＝歴史が成立するためには「探究」が行為や事件を対象とすることが必須条件だとするならば，historia＝歴史の成立は，単にヘロドトス以後というだけでなく，ヘロドトスを抜きにしては考えられないことになる。

同時に一方，historia＝歴史をはじめて用いたのは，我々が知り得た限りではアリストテレスあるいはイソクラテスであるが，その後これがただちに一般に普及したわけではなさそうで，それはアリストテレス自身，あるいはその前後の時代の他の用例からもほぼ見当はつくが，例えば前1世紀にディオドロス，ハリカルナッソスのディオニュシオスという著述家がいて，彼らの著作の中にはしばしば historia という語が現れ，そのすべてが「歴史」を意味しているのに対して，前2世紀のポリュビオスの『歴史』にも historia が頻出し，その大方は「歴史」を意味しているが，場合によっては「探究」だったり「知識」だったりしている（II 14.7; IV 28.4; 40.3ほか）。このことは次のふたつのことを教える。すなわち，historia＝歴史はヘロドトスなしには考えられないに

せよ，また，前5世紀の文献は失われてしまったものが非常に多いにせよ，この概念の成立はやはりアリストテレスあるいは彼に近い所を想定すべきだということ[30]，それともうひとつ，historia＝歴史という概念はポリュビオスの時代にもほぼ定着しているが，それが「ほぼ」でなく完全にそうなったのは，ようやく前1世紀のことであったということである。

ところでその前1世紀であるが，こういうこともある——ヘロドトスはhistoriaを行ない，その結果を書いた。[31] ツキジデスはペロポンネソス戦争について，ヘロドトス同様な*τὰ γενόμενα*を記したが，それをhistoriaという方法によって書いたつもりはなかっただろう。我々から見れば，ツキジデスにしても何らかの「探究」をしていないはずはないと思えるのだが，彼自身にとっては，その探究はhistoriaと名づけられる種類の探究ではなかったのだろう[32]。ところが，前1世紀にhistoria＝歴史という概念が成立してしまった時には，ヘロドトスもツキジデスも同じhistoriaという仕事をした人だという認識もそこにはあって，例えばハリカルナッソスのディオニュシオスが『ツキジデスについて』という論説を書いた時，それは，彼を「historiaを書いた最大の人物」と見なしてのことだった[33]。ということは，アリストテレス（やイソクラテス）がhistoriaをはじめて「歴史」の意味に使った時にも，そういう認識がその底にあってのことではなかったのか，という想像を我々に許す。しかしそのためには，アリストテレスの時代にhistoriaの概念が，変ったとまでは言はなくても，動揺していた。という別の想像もしなければならない。アリストテレス自身のhistoriaという語の用例からも分る通り，当時はhistoria＝探究という伝統的な概念もまだ健在ではあったが，ヘロドトスがhistoriaの名のもとに*τὰ γενόμενα*を記すということをやって以来，historiaと言えば「探究」，あるいは「*τὰ γενόμενα*の探究」であるよりは「*τὰ γενόμενα*を記すこと」だということが通念になりかかっているということである。それはもちろん，*τὰ γενόμενα*の記述をやる人がその後も何人か現れたせいでもあろうが，それよりはむしろ，historiaの名によってhistoria本来の「探究」を行なう人が少なくなったということでもあろう。我々が上で通観して来たhistoriaの用例もそれを示している。失われた文献が多いことをいかに考慮に入れるにせよ，ヘロドトス以後，とくにアリストテレス前後となると，アリストテレス自身を別にすれば，プラトンにしか用例が見当らず，そのプラトンの用例にしても，1は「昔はhistoriaに熱にあげたものだった」と言って，今はやっていないことを表白し，2は探究そのものであるよりは探究の結果としての知識を意味し，3

は問題外，ということになると，自然または事の探究としての historia は，historia という語を（僅か3回にせよ）使っているプラトンにおいてすら，ほとんど問題にされていない[34]。つまり，ヘロドトスからアリストテレスに至る間に，ヘロドトスによる **τὰ γενόμενα** の historia とその記述以外には，historia の名のもとに行われた見るべき業績というのがほとんどないということである。それに関しては，例えば哲学の世界で，前5世紀のいわゆるソフィストらの出現と共に，関心が自然から人事へと移って行ったという，今日では常識になっていることを思い出せば足りるのかどうかは知らない。しかしこのような状況では，historia と言えば人々がヘロドトスを思い出すのは当然のことで，それが進めば，**τὰ γενόμενα** を探究することでなく，それを記述することを historia と呼び慣らわすようになるのももっともだと思っている。

註

(1) ここでは，正確に言うと，historia でなく historikos（=historia にかかわる人，historia を行なう（あるいは，書く）人）が使われているが，この語にわざわざ註をつけて，これは「探究する人」ではなくて「歴史家」だと断わっているのは D. W. Lucas, *Aristotle: Poetics* (Oxford 1968) だけで，それほど誰もがこの箇所での historia は歴史だと思っているわけである。

(2) Oxford の K. J. Dover 先生は私への私信の中で，アリストテレスの historikos の意味は，**τὸ τὰ γενόμενα λέγειν** (1451a36) と言われているのからはっきりしている（つまり「歴史家」ということ）と言われた。それはそうかも知れないけれど，それならこれが historia＝歴史の初出なのか，もし初出ならばどういう事情でそうなったのかは誰も問うていないようである。P. Luis, 'Le mot ΙΣΤΟΡΙΑ chez Aristote', *Revue de philologie*, 29/30 (1955/56), 39ff. という短い論文も，R. Zoepffel, *Historia und Geschichte bei Aristoteles* (Heidelberg 1975) という小冊も，それぞれに力作であるが，前者は 'Historia animalium' の historia の意味の詮索に主眼があり，後者は，アリストテレスが historia と呼んだものと，彼の哲学体系のここそこから推察される限りでの歴史観との関係を論じたもので，本稿に関係はあるが，私の関心とは合わなかった。またほかに，藤縄謙三『歴史学の起源—ギリシア人と歴史』（東京1983）57f. も参照。

(3) このアリストテレスの文章を読むと，どうでもいいことだが，吉田健一『瓦礫の中』のはじめの方の，登場人物の名前をどうするかという愉快な一節を思い出す。

(4) すべての註釈家がこの箇所では驚いたり当惑したりしている。中には，第9章にしてもここにしても，アリストテレスは歴史を論じているわけではなく，詩について論ずる過程で，詩の特性を浮き立てるために歴史を引合いに出しているにすぎないのだと弁護している註釈もある。一応もっともだが，たとえついでに論じたのであっても論じていることには変りがないので，弁護することにはならない。Dover 先生は，やはり私信の中で，アリストテレスの発言は驚くべきだが，

彼と同時代の歴史家というのがテオポムポス，エポロス，アンドロティオンなどというのだったことを思えば，それも分るような気がすると言っておられた。

(5) 参考までにその箇所を列挙しておく。『気息論』477a7, 478a28, 478b1『動物部分論』668b30, 674b16『動物発生論』716b31, 717a33, 719a10, 728b14, 740a23, 746a15, 750b31, 761a10, 763b16. 以上14箇所。

(6) 池田美恵氏はこれを「人間の行為について書く人の研究，すなわち歴史」と言葉を補い，Loeb 版の J. H. Freese 訳は，一応 'historical works' と訳した上で，'This rendering, although convenient, hardly represents the Greek, which, literally translated, is the *investigation* of those who write about human actions' と註をつけている。

(7) 下記，註(29)で示すように，もし『詩学』が従来考えられていたよりも早い時期の作品だとすると，アリストテレスは，この『詩学』の後でも先でも，すべての著作の中で「探究」(時に「知識」) の意味で historia を用い，ただこの『詩学』(あるいは『詩学』を書いた時期) においてのみ「歴史」の意味に使ったことになる。無論あり得ないことではない。しかし目立ちすぎる。

(8) H. Diels-W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*[8] (Berlin 1952) I 181 Anm. 参照。

(9) W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, II (Cambridge 1962) 417n. 参照。

(10) id. 417.

(11) 註(8)に挙げた Kranz の註によれば，ピュタゴラス派の人々は幾何学のことをも historia と呼んだというから，そうなるとピュタゴラス (派) 自身自分たちの営みを historia だと認めていた可能性はある。ただしこの話の出典は4世紀のイアムブリコスの『ピュタゴラス伝』という，かなり後世のものである。

(12) 「百聞一見に如かず」という諺は西洋でも生きていると信じていたら (とは言え，私はこれに当るギリシアの諺というのを知らないが)，これと正反対のことを言った人がいる。それは，本稿でもいずれは引合いに出すことになるイソクラテスで，『パナテナイア祭』150に次のような言葉がある――「(昔からの言い伝えを鵜呑みするという場合を別にすれば) 人間というものはみな，見たことより聞いたことからの方が，より多くの正しい知識を得るものなのだ云々。」

(13) この2例からも分るように，ヘロドトスの historia は，実際には「尋ねて聞く」という方法によるのである。

(14) 下記，註(24)を参照。

(15) ヘロドトスがわざわざこんなことを断わったのは，陸上部隊については各隊の隊長の名前を洩らさず挙げたからだが，それならなぜ海上部隊についてはその必要がないと思ったのかは分らない。

(16) 問題の句は (**ἐς ἱστορίας λόγον**) だが，正にこれと同じ句がハリカルナッソスのディオニュシオスの『ローマ古代史』の冒頭にあって，そこではこの2語合わせて「歴史記述」という意味である。ディオニュシオスが historia という語をかなりしばしば，それも，つねに「歴史」という意味で使っているから，そういう推量ができる。しかし，だからヘロドトスもそうだとは言えない。

(17) O. Luschnat in *RE*, Suppl. 12 (Stuttgart 1971), 1108–12 参照。

(18) Luschant が上の註の箇所で指摘している通り，ツキジデスの表題が **συγγραφή**

というのだった可能性はなきにしもあらず（ただしこの語ですらも，彼は文中で2度しか使っていない）であり，その2度のうちはじめの方のは有名である。それはI 97.2に出て来るもので，いわゆる50年史の中で，ペルシア戦争とこのたびの戦争，つまりペロポンネソス戦争の間の50年間のことを誰も扱っていない，唯一の例外はヘッラニコスで，「彼は『アッチカの *συγγραφή* 』の中で……」と言っている。「アッチカの *συγγραφή* 」とは「アッチカに関する文書」というほどの意味だが，しばしば「アッチカ史」と訳されており，LSJ の辞書でもhistoryという訳語が与えられている。さらに，ツキジデスが戦争の第何年目がこれで終ったと述べるたびに使われている決まり文句（Luschnat のいわゆる Jahresendformeln）の中に *συγγραφεῖν* という動詞が現れるのを見ると，ここに何かありそうに思えるが，今は分らない。先に挙げた，ヘカタイオスに関するスダの辞典の記述の中の *συγγραφεῖν* と historia の対照が気になるのもこういう連関においてである。

(19) この点についても Luschnat, op. cit., 1284–8 を参照。アリストテレスがツキジデスに対して好意的であるはずがない，というのが彼の言いたいことの主眼だと思えるが，同じことをもっと断定的な口調で M. I. Finley も，'Myth, Memory and History', *History and Theory* 4 (1965), 281f. = *The Use and Abuse of History* (London 1975), 11f. で言っている。G. F. Else, *Aristotle's Poetics: The Argument* (Cambridge, Mass. 1963), 403 n.9 はこの点に関しては匙を投げている。

(20) 日本語に訳せば「探究」ということになる語は，プラトンにはかなり多い。しかしそのほとんどは *ζήτησις* であって historia ではない。プラトンは明らかにふたつの語を使い分けているが，プラトン以外ではこの区別がはっきりしないこともある。

(21) B. Snell, *Der Weg zum Denken und Wahrheit* (Göttingen 1978), 36f. 参照。

(22) 前1世紀以後はほとんどつねにこの意味で使われている。アリストテレスでも『植物論』816b28で「尋ねる」という意味になっているのを除けば，すべて（と言ってもあと3箇所しかないが）「語る」「記す」という意味で使われている。

(23) E. Schwyzer, *Griechische Grammatik* (München 1953), I 468f., 726; H. Frisk, *Griechisches Etymologisches Worterbuch* (Heidelberg 1960), s.v. *ἱστορίη* 等々を参照。

(24) 参考までにヘロドトスのこの語の用例を紹介しておくと，全部で17例あって，内7例が「尋ねる」であり（I 24.7; 122.1; II 19.3(bis); III 51.1; 77.2），10例が「探究する」「調査する」である（I 56.1; 2; 61.2; II 29.1; 34.1; 44.5; III 50.3; 51.1; IV 192.3）。ヘロドトスでは historien もまた専門語になりかかっていると言えようか。ついでながら，historia と historein を合せた用例数を巻別に示すと，I＝6，II＝8，III＝4，IV＝1，VII＝1となって，これらの語が問題なくI—IIIに集中していることが分る。これはヘロドトスのhistoriaが，差当りはまず，昔のことや異民族のことについて問うて調べることにあったということに起因していよう。F. Jacoby in *RE*, Suppl. 2, 282ff. 参照。

(25) はじめに紹介したアリストテレス『詩学』第9章（1451b1）の「historia を行なう人」というのは実は historikos で，従ってここの historia を「歴史」ととるならば，「historia を行なう人」も「歴史家」と言わなければならなくなる。

(26) Historia がひたすら「歴史」を意味するようになった後も，これらの語は相変ら

ずしばしば用いられている。

(27) F. Blass, *Die attische Beredsamkeit* (Leipzig 1892; Hildesheim 1979), II 325.

(28) 上で紹介し洩らしていたのだが，ゴルギアスの弟子だったアルキダマスに『ソフィストたちについて』という論説があって，その冒頭に historia という語が使われているのだが，これは面白い。題名はソフィストたちについてとなっていても，実はイクラテスを非難するために書かれたものだと言われていて，しかもその文言というのが，「ソフィストと呼ばれる人々の中には historia と教養（*παιδεία*）を全くないがしろにしてしまっている者がいるが……」と始まっている。イソクラテス『パナテナイア祭』246の「historia と *φιλοσφία*」というのに似ているところが甚だ皮肉だが，さてアルキダマスはここで，「歴史と教養」を意味しているのかどうか。前後関係からは，意味しているともとれ，意味していないともとれるが，私にはやはり，「歴史」とはっきり言ってしまう勇気はない。Blass, op. cit.（註(27)参照），II 47が用心深く 'sonstige Kenntnis' と訳しているのが精一杯のところだと思っている。しかし，このアルキダマスの historia とイソクラエスの historia は言わば連動するのであって，イソクラテス（あるいはアルキダマス）のが「探究」「知識」ならばアルキダマス（あるいはイソクラテス）のも「探究」「知識」だろうし，どちらかが「歴史」ならば相手の方も「歴史」だろう。

(29) 念のために申し添えておくと，イソクラテス『パナテナイア祭』の作成年代は前342年である。それに対してアリストテレス『詩学』の年代ははっきりしていない。それでも従来は晩年（330 B.C. 以後）の作とされていたが，もっと早い時期の作だという説（例えば Else, op. cit. によれば 347–2 B.C.）が現れて以後，それぞれが支持者を得ている。Else は『詩学』の中の17箇所に彼を支持する材料を見出しているが，彼自身も認めているように，いずれも決定的証拠とはならない。ただし Else, op. cit., 133, 232, 329n.96, 501n.44 等は注目しておいた方がよい。しかしとにかく，もし『詩学』の年代に関して伝統的な見解に従うならば，historia＝歴史の初出はイソクラテスかも知れないことになり，Else 説をとるならばアリストテレスということになる。

(30) 註(25)で言ったように，アリストテレス『詩学』第9章の historikos が「歴史家」である可能性は残されているが，これを除けば，historikos が「歴史に関係がある」という意味で，あるいは「歴史家」として名詞に転用された形で使われた最も古い例はハリカルナッソスのディオニュシオスであって（「歴史家」を表すのにディオニュシオスはもうひとつ *ἱστοριογραφός* という名詞も使っている。ポリュビオスはもっぱらこの *ἱστοριογραφός* だけを使っている），それまでは historikos と言えば「学問的」というのが通常の意味だったということも，この想定を助けてくれるだろう。

(31) ただし註(24)を参照。

(32) 有名な I 22.2を参照。ここを見るとツキジデスは，どんな出来事についても，他人から聞いたのはもちろん，自分がその場に居合せたのでも，できる限り厳密に調べ上げる（*ἐπεξελθών*）ことにして，決してたまたま現場にいたという人から聞いたまま（*ἐκ τοῦ παρατυχόντος πυνθανόμενος*），あるいは自分が（その時）思ったまま *ὡς ἐμοὶ ἐδόκει* には書かないようにした。この「たまたま現場にいたという人から聞いた」ことというのは，ヘロドトスなら，それをそれこれたまたま

聞いたのであっても，あるいは彼の方から尋ねた結果として聞いた（すなわち historia）のであっても，残らずそのままに記したはずである。ところがツキジデスはそのままには書かない。よくよく考証した上でないと書かない。となると，ツキジデスの記述の方がヘロドトスより「厳密」（*ἀκριβής*）かも知れないが，ヘロドトスよりかえって主観的な記述になることも当然あるわけである。

(33) Dion. Hal., *De Thuc.* 2: ***Θουκυδίδην τοῦ ἁπάντων κράτιστον τῶν ἱστοριογραφῶν***

(34) その点，アリストテレスはプラトンよりも，自然とか事実とかにふたたび関心を寄せているわけである。